

木蓮会会員の皆様へ



公立大学法人愛媛県立医療技術大学 理事長・学長 橋本 公二

平成26年4月より井出前学長の後任として、愛媛県立医療技術大学の理事長・学長に就任しました橋本です。木蓮会会員の皆様へ一言ご挨拶申し上げます。小生は皮膚科医として40年あまり働いてきたわけですが、皮膚科を選んだ理由は研修医時代に天疱瘡の患者さんに出会ったことです。当時天疱瘡は全身に水疱ができる原因不明の難病でした。「天疱瘡の研究で日本のあるいは世界の第一人者になりたい。天疱瘡の患者さんに、小生と出会って幸運だったと言われる皮膚科医になりたい」と考えたのです。それは、医師になったか

らには命にかかわるような病気(Life-threatening disease)を治療したいという願いがあったからです。しかし、通常、皮膚科は命に関わらない疾患を扱うイメージが強いように思います。その意味では、小生は異色の皮膚科医であったのかも知れません。

さて、医師として長い間働いてきたわけですが、その間に医療の考え方が大きく変わってきたことを感じます。それは、チーム医療の概念が導入されたことです。チーム医療とは、医師、看護師、臨床検査技師、栄養士、理学療法士、薬剤師など多くの人々が協力して患者の治療に当たるといえるものです。これは、重症の疾患あるいは慢性の疾患の治療では極めて重要な考え方です。その例として、褥瘡を取り上げたいと思います。20年ほど前には、褥瘡は「看護の恥」などと言われ、その発症を隠すようなことが平然と行われていました。しかし、1998年厚生労働省は褥瘡に関する研究班を立ち上げ、それがきっかけとなり褥瘡学会が組織され、褥瘡に関する研究および治療が飛躍的に進歩することになったのです。褥瘡学会は看護師、医師を中心に、栄養士、薬剤師、臨床工学士など多職種の会員から成り立っています。理事長も医師、看護師の分け隔てなく選ばれています。小生も、皮膚創傷治癒の研究をしていたので、褥瘡学会の設立当時から関わったのですが、今振り返ると、褥瘡学会は非常にフランクな学会で、褥瘡研究そのものがチーム医療研究であったように思います。

本学の卒業生の皆様方も、医療の第一線で、日夜頑張っておられることと思います。ぜひ、チーム医療を支えるHealth care professionalsの一員としての誇りを持って、我が国の医療に貢献していただく事を願っております。

臨床検査学科 教授 門田 成治



木蓮会の皆さん、お元気でお過ごしですか。ついにこの文章を書くときに私にも来てしまいました。

皆さんもご存知の通り、本学は平成16年に短期大学から4年制大学へ移行しました。それに伴い、私は一般教養科（現看護学科基礎教育講座）から臨床検査学科（基礎検査学講座）へ移籍し、この春3月で定年を迎えました。昭和63年の短期大学開学と同時に着任して以来27年が経ちました。27年と言えば長いですが、今となっては何と短いことかと感じています。目を閉じれば走馬灯のように楽しかった皆さんとの出会いを思い出しま

す。授業やサークル活動や学校行事のこと・・・、枚挙にいとまがありません。

ところで先日、県内の某医療機関へ出向いて行ったとき、そこの職員さんから「先生！」「私を覚えている？」と元気な声をかけられました。何とその人は卒業生であり、医療の世界で雄々しく活躍している姿でした。「おお、君か！」で、懐かしい思い出話に花が咲きました。近年かような体験が頻繁にあり、医療人としてたくましく成長した多くの卒業生に遭遇します。そのとき私たち教員は、『本学の教員をやって来てよかった』と強く感じます。オーバーですが、『教師冥利に尽きる』とはこのことかなと思ったりもします。

さらに喜ばしいことに、愛媛県立医療技術大学というブランド名が社会に広く高く浸透しつつある現状です。当然のことですが、皆さんのご活躍は本学在校生の大きな指標になっています。もちろん本学の教育・研究といった側面から私たち教員の指標でもあります。本学が今日ここにあるのは、これまでの教職員や在校生の頑張りに加え、指標である皆さんの絶え間ない努力に負うところが大きいと思います。本学は皆さんと共にあると言っても過言ではないでしょう。

最後に、本学を去るにあたり、27年間の学究生活を楽しく送ることができました。これも皆さんとの出会いのお蔭で、感謝の念に堪えません。今後の皆さんの更なるご活躍と木蓮会のご発展を心から祈念して筆をおきます。